

## 京ちゃんと「社説」

社説は新聞社の考え方、時論を示すものである。社説を読み比べることにより、新聞ごとの主張の違いが分かる。拙著『災後の新聞』でも、数多くの社説により現代日本の諸相、新聞ジャーナリズムの問題点に迫った。

毎日新聞 11月12日「社説を読み解く」は、衆院解散について各紙社説を比較しており参考になる。多くの社説が解散の大義に疑問を投げかけたが、読売新聞は「政治を前に進めようとする首相の決断に異論はない」と全面的に賛意を示した。ここにも安倍政権寄りの読売の姿勢があわれている。

こうした政治だけではなく、各紙社説がどのようなテーマを取りあげ、問題を提起しているかにも注目してきた。

写真は中日新聞の2012年7月12日の社説「障害児教育」である。「入学前により分けるな」という見出しで、最初に京ちゃんが紹介されている。京ちゃんが社説に登場したのは、普通学級で共に学ぶことが、障害児教育にとって重要であると、新聞が考えているからだ。まさに「京ちゃん社説」である。

社説は障害児教育の核心に迫る。「障害のある子とない子が共に育つ環境こそ自然だ。互いの違いを認め合う力が養われる。」

「障害児を入り口で引き離して別扱いするのは(障害者権利)条約の精神に照らして差別と言うほかない。障害の有無によらず、まず全ての子に地域の学校への就学通知を届け、望めば特別支援学校を選ぶ。そうやって従来の原則と例外をひっくり返さない限り、条約の批准はまなるまい。インクルーシブ教育には人手と金がかかる。しかし、それよりも大切なのはそこに携わる人々の意識改革だ。」

この社説から2年半近く経つ。インクルーシブ教育の現実はどうか。意識改革は進んだのか。京ちゃんの学校生活を通じて、多くの成果と課題も見えてくる。

(2014年12月10日)

